

世界帝国主義の暗闘に抗しプロレタリア世界革命の最前線へ

游撃

第 15 号

月一回発行
1976 3. 15

定価 100円

共産主義者同盟
游撃編集委員会

連絡先 東京都世田谷区千歳郵便局
私書箱四号
振替東京〇一九五七八三

朝鮮人民の南北自主統一を断乎支持し、安保協粉砕闘争へ決起せよ

二月二十九日のブラウン来日、三月「日米安保協」開催と日米侵略軍事同盟の強化がベトナム人民の民族解放社会主義闘争の決定的な勝利以降、加速度的な速さで進められている。「日米安保協」はこうした一連のベトナム以降のアジア反革命臨戦体制形成への重大な一環として存在し、その矛先を朝鮮半島にむけた日米両帝国主義の反革命性を緻密化し具体化する場ともたれようとしている。

わが同盟は、フォード来日阻止、九・三〇天皇訪米をアジア反革命秩序形成へむけた日本帝国主義の内外にわたる宣言として把え、自らを革命党として打ち鍛えつつアジア反革命に対決し闘いを組織してきた。そしてそれは、「九・三〇政治共闘」に対するわれわれの積極的な展開として、あるいはまた「労働委―都学活」の党の戦闘陣型への改組として物質化され、「九・三〇政治共闘」の「侵略阻止共闘」への飛躍が問題とされるに至った。

しかしながら、こうした闘いでは、未だ不十分であることは否定すべくもない。朝鮮侵略、反革命戦争体制が日米帝国主義の暗闘の結果としてプロレタリア大衆の眼前につきつけられたにもかかわらず、このこと自体を、日米「韓」反革命体制粉砕へと向け全人民―全プロレタリアのものとして組織し抜くことができず、ただ一般的に帝国主義の「腐朽性・墮落性の表現」としてとらえる諸潮流と問題を民主主義に解消しようとしている諸政党の存在を許容していることはそのことを示している。

戦前、戦後貫くアジア階級闘争の地平踏まえ、日本プロレタリアートの革命的地歩打鍛えよ

米日「韓」反革命侵略体制は、いうまでもなくただ一般的に帝国主義間矛盾の激化―戦争という帝国主義の原理的矛盾の展開として存在するのみではない。それは、そうした帝国主義体制と根底的に対立するアジア階級闘争の激化に対する帝国主義の侵略と反革命として存在する。ベトナム解放闘争がベトナム民族に対する仏帝―日帝―米帝の歴史的な支配に対する最後の勝利であったように、現在の朝鮮危機の本質は、一九世紀中葉以降の朝鮮民族の民族自決―南北統一という民族解放闘争に対する帝国主義の侵略と反革命として存在しているのだ。したがってわれわれは、日米帝国主義の危機を語り、その侵略性―反革命性を指摘するのみでは決定的に不十分であり、問題は、日本プロレタリアートの闘争の歴史性をもアジア階級闘争の一環として把えること、現在の帝国主義の侵略と反革命を

スケジュール

- 4. 2 本山闘争勝利総決起集会
午込公会堂…………… P M 6
- 4. 3 革命派労働者運動討論集会
朝鮮連帯…………… P M 6
- 4. 19 安保協粉砕総決起集会

今号目次

- ☆ 安保協粉砕闘争へ決起せよ…………… P (1)
- ☆ 1・28 狭山上告審闘争報告…………… P (6)
- ☆ 2・9・10 全国学生総決起集会報告…………… P (7)
- ☆ 2・22 三里塚闘争報告…………… P (7)
- ☆ 天然ガス闘争の指針…………… P (8)
- ☆ みどり生協闘争報告…………… P (9)
- ☆ 春期革命派労働者運動の構築を…………… P (10)

アジア解放闘争の関連の中で把えることが要求されているのだ。

南北朝鮮の自主統一支持、というわれわれのスローガンは、レニン主義論あるいは民族問題の機械的アテハメであつてはならない。一九四五年以前と以降を二分する民主主義史観の偽購性をわれわれが、あばきたすならば、旧日本帝国主義のアジア侵略と現日本帝国主義のアジア侵略を分断して把えることの偽購性は明らかになる。アジア人民の闘いは旧日本帝国主義の崩壊によつて変質したのでもなければ、完全に勝利したわけではなく、それは、それ以降現在に至るまで苦闘を強いられているのである。アメリカ帝国主義は、第二次大戦においては、帝国主義としての独自性を貫きつつ日本帝国主義に対する闘争を市場分割戦として行つたまでであつてその決定的勝利が明確になるや否や闘いの矛先は、(それ以前から)もそうであつたが、それ以降は露骨に)アジア階級闘争にむけられ、日本帝国主義に従属しそれとともに人民を支配していた旧支配層(封建的・買弁的勢力)の温存とそれによる支配を継続させることによつて日本帝国主義に代わつて、その支配の様式の差は存在するが、階級的・民族的支配を行おうとしたのである。

したがつて、アジア階級闘争・民族解放闘争は、旧日本帝国主義に対する闘争の徹底化としての質を保持することによつて、より近代化した支配としての米帝支配に対する闘いとしてアジア全域において闘い抜かれたことをわれわれは明確に認識しなければならぬ。朝鮮における南北自主統一——民族主義の闘いは、なによりも、そうした歴史的な過去の幾多の闘争を踏まえて成長してきた闘いであり、国連軍の名による朝鮮戦争——朴軍事クーデター——日韓会談は、そうした闘いに対する日本あるいは米帝の侵略反革命として行われてきたのである。そしてまた北朝鮮人民の闘い(その生活と闘争の総て)社会主義の建設へむけた闘争)もこうした帝国主義の侵略反革命に対する闘いとして存在していることはいふまでもない。

しかるに、日本のかつてのわれわれも含めた革命的諸潮流は、日共の占領軍に対する解放軍規定を批判しつつも、そうしたアジア階級闘争の連鎖として日本階級闘争を把え得なかつたが故に、それ自体は一定の意味と正しさを保有しているが、反帝戦略主義におちいり、日帝の復活、あるいは対外進出を「八・一五」を基点として糾弾するという傾向を脱し得なかつた点こそ明確に把え返さねばならない。「八・一五」を基点とする思想からは、日帝のアジア人支配・朝鮮人支配に対する「抑圧民族」の小ブルジョア的自己批判は提出されるが、あるいはまた、そうした認識とレニン帝国主義論の機械的結合は生み出されるが、日本プロレタリアートの独自性——すなわちその革命的主体的立場は明確にはされないのだ。

「朝鮮人民は、八・一五解放」の時点において日本人統治者からの権力の移譲を要求し、一六日は全政治・経済犯の釈放をかちとつた。そして、各地方において人民の政権・人民委員会を組織し、日本人植民者たちの行政機関および重要施設を接収し、運営した。しかし日本人人民は、連合国軍総司令部の「民主化要求」があるまで当然な事なればならない革命的任務を怠り、日本支配階級の「一億総サンゲ論」や「国体護持」「天皇制擁護」にまどわされていたのである。これには、くりかえし言うが、他民族、他国家を侵略する過程で長年培われていた侵略思想や天皇制支配体制によつて植えつけられていた隷従意識が大きく作用していたのであろう。」(高峻石)

まさしく、その通りである。われわれが、日本帝国主義のアジア侵略とアジア階級闘争の進展を把えるときに、忘れてならないのは

この視点なのだ。この視点を忘れるとき、現在の猛省・血債論は一億総サンゲ論に転化し、そこから権力と階級性の問題が抜けおちるからである。日本プロレタリアートが自らを権力として組織することこそが問われたのであり、それこそが、アジア階級闘争と連帯することに他ならなかつたのだ。

なぜなら、たとえば、朝鮮における反日帝の闘いは、朝鮮人民の手によつて反日帝の武装ゲリラ闘争の中できたえられ成長した朝鮮共産党の指導の下に人民委員会を生み出し、朝鮮人民の統一と自決へと「八・一五」を一つのエポックとして進もうとしたが、アメリカ帝国主義とそれに協調した日本帝国主義の手によつて阻まれながらも(ソ連スターリニストのそれへの妥協も含めて)、その闘いは、「南北統一」の闘いとして戦後史の中で一貫して闘い抜かれてきていることを忘れてはならないからである。朝鮮戦争は、まさに、こうした朝鮮人民の革命闘争に対する反革命侵略戦争として存在したのであり、体制間矛盾にもとづく戦争でもないし、古典的な意味での帝国主義戦争として存在したのではないのだ。そしてまた、この戦争によつて政治的・経済的に復活した日本帝国主義はアメリカ帝国主義とともに、かつての支配層——つまり買弁資本と旧支配層との結びつきを深め、アジアの帝国主義支配への重大な一翼へと極く短時間で成長したのであつた。

したがつて、南北朝鮮の自主統一への闘いは、新旧日本帝国主義に対する闘いであると同時に帝国主義世界体制に対する闘いとして存在していることはこの歴史的な帰結から明瞭なことである。

ところが、問題は、日本においてはすでに上げた引用でいうなら「日本人民は連合国軍総司令部の『民主化要求』があるまで、当然な事なればならない革命的任務を怠り」、そればかりか、日本の前衛党(日共)は、独自の権力形成などはその発想の外であり、それのみか占領軍の民主化を「解放」と規定することによつて、大枠において、日本帝国主義内勢力であることを自認するしまつたのである。なぜなら、日本の戦後の民主化がその主権を大きく制限されていたとはいへ、旧日本帝国主義の国家を認め、その帝国主義国家の改造として進化したのである以上、占領軍の民主化を解放として規定した共産党はそこにおいては少なくとも帝国主義内勢力であつたことこそ問われねばならないからだ。事実、日本共産党が、コミンフォルムの日本共産党批判がなされたとき、朝鮮労働党の在日朝鮮人の日本共産党からの事実上の分離要求(一九四四年)が出されるまでは、在日朝鮮人を日本(帝国)内の少数民族としてとらえていたという事実は、当時の国際共産主義運動の限界、あるいはまた朝鮮労働党の在日朝鮮人問題に対する路線の問題があつたにせよ、日本帝国主義者が在日朝鮮人の法的地位を「日本国籍、記号『朝鮮』あるいは『韓国』」として扱つていたことに対応すると主体的にはいわざるを得ないからである。

したがつて、そこからは、在日朝鮮人プロレタリアートの革命性を国際主義的に把え、自らの革命性への飛躍として問題を立てようとしたのではなく、形式的民主主義に基づき、そのエネルギーを「日本革命」への「利用」として用いる思考がその主流を占めていたのだということを見なくてはならない。(朝鮮民族を日本民族としてみなすこの思想は、日本帝国主義の同化思想そのものであり、戦前においては朝鮮人プロレタリアートを日本人プロレタリアートと同一平面で組織し、そのことによつて結果的には朝鮮人プロレタリアートを帝国主義者による集中砲火にさらしたというこの恥ずべき事態は、一方で形式民主主義、一方で日本国内左派としての

位置に基づいていたのである。われわれはプロレタリア民主主義、
實質的戦闘的民主主義に基づきつつ、帝国内左派として限界を突き
破る地歩を固めねばならない。

したがって戦後の民主化が、革命委員会によつてではなく、アメ
リカ軍によつて制限されていたとはいえず、旧日本帝国主義の国家機
構を認め、その大枠によつてなされたことを痛苦に総括されねばな
らないし、その地点に立つて、アジア階級闘争をわがものとするこ
とが要求されているのだ。

だから「朝鮮の南北自主統一支持」というわれわれのスローガンは、
単に、教条としてのレーニン主義から導き出される抑圧民族のプロ
レタリアートの責任としてのスローガンでも、また、過去の日帝の
共犯者としての国民という、ある意味では「一億総サンゲ」な血
債・猛省としてのスローガンであつてはならない。明らかにそれは、
帝国主義に対する日本プロレタリアートと朝鮮人民をつなく、歴史
的な日帝あるいは米帝に対する闘いを踏まえ継承したスローガンと
して提出されねばならないのである。

帝国主義的排外主義と闘い 米日「韓」の南北分断固定 化、戦争体制を粉碎せよ

ところが、社共をはじめとする排外主義勢力は、日本国のアジア
人民に対する民族的責任論を唱えはするが、それは日本帝国主義に
包摂された上での「責任論」であることはすでに見てきたところだ
が、社会党も総評に至つてはアメリカの朝鮮侵略戦争に対して国連
軍支持を表明し排外主義に陥入つたことに象徴されるように、その
階級の本質は明白である。そして、そこにおける組合内観念派とし
て成長してきた革マルが、朝鮮民族の「南北自主統一」を支持、
の持つ重大性に無自覚のみか、それに対する反対さえも表明して
いるのは、当然といえば当然のことであるが、しかしながら根本的
な問題は、彼らが、こうしたアジア階級闘争の歴史性・現実性から
出発していないことによつていえるのである。つまり彼らは、
人間主義・疎外論の立場から問題を立てるが故に、階級対階級とし
てのアジア階級闘争を把握することができず、戦後民主主義の中から
主体性論として成長してきたその観念的人間主義の立場——その立
場の歴史性を対自化していかないことはいうまでもない——を絶対化
し、南北分断という戦後体制を前提として問題を立てるが故に、朝
鮮労働党もスターリン主義と切つて捨てることにならわれているよ
うに、これもまた帝国主義内観念主義としての排外主義に転化させ
るを得ないのだ。

こうした排外主義に対して中核派は、レーニン帝国主義論の復権
として批判を加えていることにならわれているように、こうした排
外主義とは明白に異なるとはいえず、レーニン帝国主義論を疎外論に
つけ加えたに過ぎず、その批判の不十分性は指摘されねばならない。
すなわち、中核派の朝鮮戦争説は危機論の構造は次の三つの系譜の
議論の寄せ集めでしかないからである。①危機に立つ日米帝国主
義がその矛盾の処理として朝鮮侵略戦争を巻き起こそうとしている
こと ②南北統一支持は抑圧民族としての責任であること ③朝
鮮労働党はスターリン主義であつて最終的には打倒されるを得な
いこと云々である。

朝鮮の南北をつなく民族解放闘争が、戦前—戦後を通じて一貫して闘
われており、朝鮮労働党は、その闘いの中心として存在している
ということであり、この闘いをマルクス・レーニン主義つまりは世
界革命の視点からその総体としてどう把握するのかということの欠
除である。先にあげた①②がレーニン帝国主義論における抑圧民族
のプロレタリアートの責務論として純化され、③は疎外論をもとに
した社会主義論の適用として切り離されている。そして、この両者
をつなぐのが「人間主義」に過ぎないという構造は、根本的には、
先に述べたような「八・一五」解放の良質な受け継ぎとしてしか歴
史をみることにできない日本帝国主義に対する「内部告発」「民主
主義主義左派の位置を完全に克服できないことを表明している。

第一次・第二次ブンドはたしかに日本帝国主義の自立として安保
闘争をとらえ、朝鮮再侵略として日「韓」会談を把握、それに対する闘
いを組織し闘い抜いてきた。しかしながら、いうまでもなく、そう
した闘いは、日帝の「自立」であり「再侵略」に対する闘いではあ
つたが、歴史的なアジア階級闘争の一環として自らを位置づけるこ
とができず、それ故、在日朝鮮人の闘い、およびその存在の位相が
明らかにしている民主主義体制といわれる戦後日本帝国主義の存在
構造をその根底において把握することができず、「七・七華青闘」
の自己批判要求となつてつきつけられてきたことは周知の事実であ
る。ここで問われていたのは、現在の把握を返すならば、われわれ
が在日朝鮮人・中国人の運動に無自覚であつたことを、南北分断の固
定化を歴史的所与として把握していた点において把握しねばならな
い。それは根本的には日本帝国主義が八・一五によつて完全に消滅
したという歴史観の上に、その復活—自立—侵略として把握してい
たことによるのであり、そこからは、日本帝国主義の進出を糾弾す
ることはできても、アジア階級闘争の連鎖の中で日本プロレタリア
ートの位置を鮮明にさせることができず、したがつてそれ故に一國
主義的限界をはらんでいたものとして自己批判的に把握されねば
ならない。

在日朝鮮人・中国人の闘争の本質は、旧日本帝国主義に対する民
族解放闘争の継続として存在していると同時に、米日両帝国主義に
対する闘いとして存在している。われわれはこのことを明らかにす
るために、単に、在日朝鮮人・中国人の闘争をみることにのみでは決
定的に不十分である。それはいうまでもなく、朝鮮半島に対するア
メリカ帝国主義と旧日本帝国主義の合作による旧日本帝国主義の支
配下での朝鮮人支配層の温存・育成との関連をみなければならぬ。

アメリカ帝国主義は、朝鮮抗日ゲリラの中軸をしめる朝鮮共産党
の指導による人民委員会の日本植民地主義者からの権力奪取を南朝
鮮において徹底的に妨害し、軍政をしき、旧日本帝国主義に協力し
た地主層、買弁資本家の追放を行うことを押しとどめた。そして、
アメリカ帝国主義は、日本においても、十一月三日の「日本占領お
よび管理のための連合国軍最高司令官にたいする降伏後における初
期の基本的指令」において、「朝鮮人は軍事的に許さざり解放國
民としてとりあつかりが、必要な場合は敵国人として扱う」とのべ
ていることに端的にあらわれているように、また、十一月一日には
在日朝鮮人の帰国輸送のためという名目の下に日本帝国主義によつ
て強制連行され、強制労働を強いられたい朝鮮人・中国人の炭鉱
労働者に対して強制労働を強いる布告を出していたことにもみられる
ように、基本的には民主主義的なポーズによつて装われているが、
日本帝国主義の朝鮮支配の肩代わりを行ったのである。

したがつて、アメリカの対「韓」占領政策と日本占領政策における在

日朝鮮人支配政策は、その根本において朝鮮民族の独立を保証するものではなく、日本帝国主義の支配に代ってアメリカ帝国主義の支配を打ち立てることだったのである。マッカーサーは、李承晩政権を南朝鮮においてデッチあげ、この「大韓民国」の全朝鮮の支配を武力で行うことを決意して、朝鮮人民による南北統一の動きを粉砕しようとしたのである。アメリカの朝鮮侵略戦争の本質はここに存するが、この朝鮮戦争の開始は、同時に、日本政府におけるレッドパージ団体等規制令攻撃となつて繰り広げられ、日本朝鮮人聯盟と在日朝鮮民主青年同盟は解散を命ぜられ、その財産を没収させられたのであった。そしてまた李承晩政権のデッチあげが、「駐日韓国代表部」の日本設置につながり、在日朝鮮人の反日帝・反米帝闘争の画策をはかるものであったことはいまでもない。

つまり、以上みてきたように米帝国主義は日本帝国主義の朝鮮支配の歴史を継承し、日本帝国主義はまた積極的にそれに協力し、朝鮮民族の抑圧と支配を行おうとしたのであり、南北分断はその結果であることはいまでもない。そしてまた、在日朝鮮人の法的「地位」、「教育」、「祖国との往来」等々のありとあらゆる闘いはそうした朝鮮民族の日米帝国主義に対する闘いの継続そのものであり、日米両帝国主義の帝国主義的朝鮮支配そのものの打倒へと向かわざるを得ない。

すでにのべたように在日朝鮮人の「法的地位」の問題に関しては、日本帝国主義は、サンフランシスコ条約までは「在日朝鮮人は日本国籍を有する」として、帝国主義国家の継続性を主張するとともに「大韓民国」のデッチ上げ以降は、記号としての「朝鮮」あるいは「韓国」というデタラメ極まりない見解を発表することによつて自らの帝国主義国家の正統性を踏まえつつ南北分断政策を行つてきた。そして日韓条約以降は、それを国籍としての「韓国」に切りかえ、韓国籍取得者のみ「協定永住権」を保証するという露骨な南北分断政策を在日朝鮮人に加え、朝鮮籍から「韓国籍」への切りかえを強要（民族自決権の無視）しつつ、「韓国籍」から朝鮮籍への切りかえを認めないというペテンを行つてきたのである。

そして、「協定永住権」非取得者が政治的・社会的・経済的無権利状態におかれていることはいまに及ばず、「協定永住権」取得者もその「永住権」の本質が、日本の南朝鮮の植民地化を前提としたものであり、朴のファッショ的支配への在日朝鮮人への隷属、つまりは日本帝国主義への屈従を強いるものである以上、不断に日帝への直接の攻撃にさらされたものであり、過去の歴史性を踏まえた国際主義的関係とは縁もゆかりもない帝国主義的他民族抑圧支配そのものの法的表現として存在している。これは、現行入管令とともに入管体制の重圧をなして、在日朝鮮人民の闘いへの強力な抑止力となつていいる。そして、入管法―外登法の上呈は、こうした体制を更に強化するものとして存在しているのだ。

だが、すでにこの入管体制や「協定永住」の民族抑圧差別攻撃と対決する文字通り決死の闘いは開始されている。

こうした在日朝鮮人、南北朝鮮の人民の闘いに日本プロレタリアートが無自覚であつていいわけがない。日本プロレタリアートが体制内存在であろうと欲しないならば、こうした闘いを学び、そうした闘いが明らかになっている帝国主義批判をこそわがものとして把握することが要求されているのだ。

日本プロレタリアートが、真に自国帝国主義を打倒し、プロレタリア国際主義を貫き、世界革命の一翼を担おうとするならば、朝鮮人民の反日反米帝の闘いに学び、それと強固な団結を、口先きだ

けでなく、自らの闘いにおいてそれを形成せねばならない。

日帝の朝鮮植民地化攻撃粉砕！ 朴カイライ政権打倒！ 朝鮮人民の革命的決起に連帯し、 安保協粉砕闘争へ決起せよ

現在、日米両帝国主義は、ベトナム民族解放闘争の勝利、アメリカ帝国主義の敗北を総括しつつ、アジア反革命戦争体制の構築を着々と押し進めている。沖縄を前進基地とする日米両帝国主義による「九日戦争戦略」はそれであり、日米「韓」の合同演習もこのプランにもずいて行われている。このプランは、非武装地帯沿いの前線に兵力を集中し、五日間で、戦略爆撃機B52戦闘爆撃機などを一日約一〇〇〇機の集中攻撃を行い、その後四日間で歩兵部隊による地上掃討戦を行うというものである。F4ファントムによる核模擬爆弾の伊江島射撃場での投下訓練、沖縄から三八度線までの戦車の輸送を八時間で行う作戦、B52のグナムへの一分きざみに発進する訓練、等々、米―日の戦争体制は着々と準備されている。そして、朝鮮戦争において沖縄は米軍の直接の基地であり、日本本土は間接の基地であることは自明であるが、日帝の12カイリ領海方針の決定と津軽―対馬両海峡のソ連潜水艦の輸送妨害を考慮した封鎖作戦は、基地沖繩―日本の意義を鮮明にさせている。ロッキードのPXL（対潜哨戒機）はこうした役割を帯びているのだ。

こうした米日「韓」軍事同盟の強化とその戦争（体制）は、ロッキード事件にはつきりとみられたように、米―日―「韓」の支配者と独占に莫大な「資金」を提供し、そうした支配者による人民支配を永続させる重大なルートでもあり、そしてそれは同時に、過剰生産による帝国主義の矛盾を軍事産業の巨大化によつて支えている帝国主義の構造そのものの重大な支えになつていいる（そのことから生ずる日本帝国主義とアメリカ帝国主義の矛盾をその根底においてはらんだものとして存在している）が、より重大なのは、朴体制の危機、つまりは南北統一を求める朝鮮民族の反日反帝闘争に対する帝国主義の侵略反革命臨戦体制として存在しているということである。アメリカ帝国主義の朝鮮支配が、ドル危機とともに危機に瀕して以降、日「韓」会談を重要な契機として南朝鮮支配にのり出した日本帝国主義は、南北朝鮮人民の対日請求権問題等の法的正当性を一切無視して、日本独占の対「韓」侵略に都合の良いように「請求権問題」を朴に押しつけ「無償三億ドル、有償二億ドル」の「請求権および経済協力協定」をもとに進出を開始した。そしてそれ以降も数度に及び「援助」を行うことによつて日本国政府は日本独占体の植民地主義を援助したのであった。

朴は、こうした日本独占資本の南朝鮮人支配を保障するために「輸出自由地域設置法」や「韓日租税協定」を締結し、ありとあらゆる手段を弄して、日本帝国主義の手先をつとめ人民抑圧に全力をかけたわけなのである。「輸出自由地域設置法」は、日本独占に対して用地・用水・動力に対して最大限の便宜を与えるほかに、労働争議権を労働者には認めず、原材料を無関税で持ち込む権限を与え、また、この地域への無許可出入りに対する懲罰を規定するものであり、「租税協定」は日本独占に対する税政上の優遇（減免）を規定した

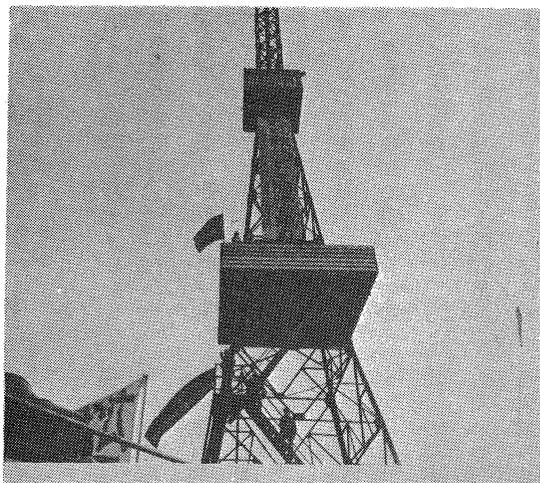
ものであるのだ。朴のこうした反人民的政策に助けられ、否それを強要しつつ、日本独占は南朝鮮人民を植民地国の「人民」として奴隷としてとり扱っていることはいうまでもない。馬山をはじめとする日本「租界」においては植民地支配のありとあらゆることが再現されているのだ。

こうした、日本帝国主義の朝鮮支配に、朝鮮人民の怒りは爆発せざるを得ない。

李承晩を打倒した四・一九革命、一九六四年の「韓日会談」に反対する学生を中心とする闘争が、つねに「南北統一」を掲げ、その時々のカイライ政権と熾烈な闘いを行ってきたことは周知のことであるが、日本帝国主義への朴の隷属と南朝鮮の植民地化攻撃が全人民に対して進められるとともにこの闘いは更に強固なものになっていった。一九七二年五月二六日の金日成の南北自主統一にむけたアピールは、そうした動きを更に強めたのであった。そして朴もそうした動きに押されて同年七月四日には統一促進についての声明を出さざるを得ないところまで追いつめられていったのである。しかしながら、朴と日本帝国主義者は、こうした動きを弾圧すべく同年十月非常戒厳令をしき、維新憲法体制を布告し、ファッショ的弾圧体制を確立したのである。

金大中事件、民青学連事件のデッチ上げによる被告三二人の内、金芝河ら七人への死刑判決、朴大統領狙撃事件、東亜日報への弾圧等々、というK O I A を使った「情報ファッショ」攻撃は、日本帝国主義の悪辣極まりない南朝鮮人民への搾取と収奪を物語っており、また、朴―日帝のファッショ的弾圧に対してひるむところなく闘っている朝鮮人民の英雄精神を示している。そしてまた、こうした「韓国」における自主統一・民主回復の闘いは、四反（反封建・反外勢・反独裁・反買弁）運動として四・一九闘争を重大な契機として引きつがれ、日本においても分断されていた南北の運動を「七四共同声明支持」という一点においてはあが結合させるまでに進展したのであった。

しかしながらこうした闘争の進展は、単に朴のみならず、日本帝国主義にとつても重大な脅威とならざるを得ない。日本―南朝鮮をつなぐ民族解放闘争の進展は、大きく朴をゆさぶり、その打倒へつながらるからである。朴も、南朝鮮におけるファッショ体制の日本へ



岩山大鉄塔死守



1. 28 機動隊の壁を突破する同志

の拡大を要求する。かくして、在日朝鮮人に対する政治的弾圧、韓国籍への強要、出入国管理令の強化が日本帝国主義者の課題となり、在日朝鮮人に対する朴ファッショ体制の適用と日本帝国主義への隷属化が日本帝国主義によって再三再四にわたって行なわれ企てられてきたのだ。そして、いうまでもなく、こうした在日朝鮮人差別は、一方で、日本人労働者を排外主義に駆りたてるものであると同時に、日本人労働者に対する差別と分断支配を更に厳密化し、系統化しようという動きと一体に進行しつつあることはいうまでもない。それはイデオロギー的には天皇制イデオロギーの復活を頂点として、構造的には、朝鮮人労働者の収奪を基礎とした一部の独占体の労働者の超過利潤による買収にもとづく労務管理体制の強化であり、それによる階層的支配下である。

われわれは、したがって、在日朝鮮人に対する攻撃を、そうした帝国主義的管理体制の強化と排外主義的動員構造への動きとして把握ねばならないし、在日朝鮮人に対する攻撃を、全労働者への攻撃として把握することによって日本プロレタリアートをプロレタリアートとして鍛えねばならないのだ。

したがってわれわれは、すでに明らかにしたように、米日「韓」の戦争準備を単に、帝国主義が不可避的にもたらす戦争政策としてのみ捉えては決定的に不十分である。このような朝鮮人民と日本労働者階級の抑圧と隷属をより強化し拡大することを目的として行なわれる侵略反革命戦争体制の内外にわたる形成として把握、南北分断固定化の全朝鮮人への拡大―日本プロレタリアートの闘争圧殺を目的として行われようとしている侵略反革命そのものなのだ。

日米安保協は、こうした朝鮮侵略反革命体制の重大な一環として存在している。したがって、わが同盟は、安保協粉砕の闘いを朝鮮人民の南北自主統一、反日反帝闘争の位相をわがものとしつつ、闘い抜かねばならない。それはすでに述べてきたように、日帝に許容された民主主義を出発点とする反帝戦略主義的位相での闘いではなく、日本帝国主義とその議会が民主主義の偽善性を糾弾しつつ、真に帝国主義をその根底において批判しきる非公然、非合法の闘いを根底にすえたアジア階級闘争の一環として闘われねばならない。

石川氏奪還へ向け、上告審闘争貫徹す！ 1. 28東拘包圍―日比谷闘争報告

全国の同志諸君！「遊撃」諸君！

一〇・二六東拘包圍糾弾闘争、一〇・三一
日帝―寺尾の差別無期日実質死刑判決糾弾闘
争、一一・一一―一四「狭山の黒い雨」上映
討論集会、狭山現地調査闘争の断固たる闘い
の地平を受けつぎ、この成果をもつて、一・
二八上告審闘争、東拘―最高裁を貫く闘いは
成功裡のうちに闘い取られた。

一月二八日、「侵略反革命阻止全国政治共
闘（準）」の呼びかけの下、「一・二八実
行委」によって東拘包圍糾弾闘争が闘い抜か
れた。わが関東労働委、都学活に結集する権
力闘争派は、政治警察の様々な弾圧をはねの
け、圧倒的な隊列をもつて東綾瀬公園に登場
し、闘争を領導し抜いた。赤ヘル、赤ゼッケ
ンに身を固めたわが権力闘争派をはじめ各部
隊が結集し、ただちに集会が開始された。ま
ず司会から、狭山差別裁判糾弾！無実の石
川氏即時奪還！部落完全解放に向け、とり
わけ、昨年一月二五日の最高裁による石川氏
の保釈申請に対する却下攻撃と「人事極秘、
特殊部落地名総鑑」なるものの存在を断固糾
弾し、一九六三年に差別不当逮捕攻撃を受け
て以来、一三年に亘る超長期投獄を受けてい
る石川氏に断乎連帯し、東京拘置所に対して
糾弾をたたきつける闘いの意義が鮮明に提起
され、圧倒的な「異議なし！」と拍手によつ
て全員に確認された。そして実行委参加団体
の発言を受け、最後に関東労働委の同志から、
狭山差別裁判糾弾！一〇・三一日帝寺尾に
よる差別「無期」日実質死刑判決糾弾！一
二・五保釈却下攻撃糾弾！最高裁上告棄却
策動粉碎！最高裁日帝村上―吉田体制打倒！
狭山上告審闘争勝利！「人事極秘、特殊部
落地名総鑑」糾弾！無実の部落青年石川一
雄氏即時奪還！部落完全解放！の鮮明な
提起がなされ、全員による強固な意志統一が
かちとられた。集会後ただちにデモにうつり、
機動隊のテロリンチを威力ではねかえし、
獄中の石川氏の苦闘になんとも応えざり、
狭山闘争の完全勝利をなげなんでもかちと
らんとする決意も固く、最後まで果敢に闘い
抜いた。

東拘包圍糾弾闘争を圧倒的な隊列でもつて
闘い抜いたわが関東労働委、都学活を主軸と
する「一・二八実行委」は、日比谷へ向けて
進撃した。
日比谷における解放同盟都連主催の集會に

先立ち、「一・二八実行委」による独自集會
がかちとられた。司会から、東拘包圍糾弾闘
争の独自の貫徹の意義と最高裁闘争に向けて
の闘いの意義が提起され、独自集會を貫徹し
た。

午後六時すぎ、力強く開會が宣言された。
すでに日比谷野音は、文字通り戦闘的部落大
衆、労働者、学生の圧倒的な結集がかちとら
れていた。集會はただちに、部落解放同盟中
央本部の提起を受け、支援の発言を受けた。
そして、石川氏のアップルが読み上げられ
た。病に触れながらも、なお獄中一三年の
不屈の闘いを貫徹し、「差別・無実」と、狭
山闘争の完全勝利を熱烈に訴える氏のアップ
ルを、圧倒的に確認し、集會は最高潮に達
した。集會後、常盤橋公園に至るデモに移り、
解放同盟を先頭として、延々数キロメートル
に亘るデモンストレーションは、至るところ
で、この闘いの高揚を圧殺しようとする。国
家権力、機動隊の弾圧を戦闘的に打ち破り、
文字通り都心を揺がし、圧倒的な労働者人民
の強い関心と注目を集めて終始戦闘的に最後
まで貫徹された。

寺尾判決のうしろだてであった最高裁日帝
村上―吉田体制は、上告審闘争の高揚をまの
あたりに見、すでにその をむきだしている。
昨年一月二五日の最高裁による石川氏の保釈
申請に対する却下攻撃こそそれであり、我々
は断固として却下攻撃を打ち砕いていかな
ければならぬ。この間の鋭い差別排外主義、
反革命攻撃、権力再編―破防法社会化攻撃と
の非和解的、非妥協的対決は、狭山闘争が七
〇年代権力闘争の質をあらわした全国政治闘争
として闘わなければならないし、そうした闘
争の発展のみが勝利への展望を切り拓くのだ
ということをはっきりと示している。か
かる闘いを日々決戦決勝の決意をこめて闘い
きらなければならない。

この闘いを闘い抜くにあたってまず何によ
りも昨年末部落解放同盟によってバクロされ
た「人事極秘、特殊部落地名総鑑」なるもの
の存在を断固糾弾しなければならない。それ
はその案内状からも明らかなく、徹頭徹尾
部落差別に貫かれたものである。しかもこの
案内状が八百枚以上もばらまかれつつも、解
放同盟に知らされたのはただの一社のもので
すぎないこと、そして「地名総鑑」が明らか

ないものであることからして、極めて重大視
されなければならない。

こうした狭山闘争の煮つまりは、いまや決
定的な段階をむかえており、様々な政治勢力
をして、その政治性をますます鮮明にしてい
る。とりわけ日共は、一連の差別反革命キャ
ンペーン、八鹿高校差別教育「一・一一差別
論文」、「国民融合をめざす部落問題全国会
議」の結成により、ますます狭山闘争、部落
解放闘争に対する敵対を強化している。他方
では、「新左翼」の内にも、不断に人民戦線
派へ屈服する傾向が存在する。それは我々が
第二インター化傾向として批判してきたこ
ろの第四インターである。彼らは、部落解放
闘争の独自の意義を「労働者階級の闘い」一
般に解消してしまい、現実的には、組合運動
の一課題に狭山闘争をおとしこめるとい
う。明らかに組合主義政治・経済主義的政治闘争
に転落しているのだ。このような第四インタ
ーが、総じて総評民同、社共人民戦線派の補
完物でしかないのはますます明らかになって
いる。我々がかかる社共人民戦線派、四トロ
に代表される傾向との党派闘争をつよめ、闘
いの前進をかちとらなければならない。

我々の任務はきわめて重大である。一・二
八の爆発は狭山闘争のはらむ巨大なエネルギー
をさし示した。これをなんとしてでも、七
〇年代後期日本階級闘争の革命的、武装的発
展へと結合、発展せしめねばならない。「無
実・差別」「糾弾・奪還」の革命的原則を高
く掲げ、一切の清算主義、敗北主義、融和主
義を粉碎し、狭山上告審闘争の大爆発をもつ
て、寺尾判決を糾弾し、石川氏を奪還しなけ
ればならない。我々は、上告審闘争の恒常的
戦闘体制をもつて、最高裁日帝村上―吉田体
制による上告棄却策動、密室書面審理策動を
粉碎し、検察当局の全証拋開示、事実審査、
口頭弁証をかちとり、一二・五保釈却下攻撃
を糾弾し、石川氏の保釈をなげなんでもか
ちとらなければならない。獄中の石川氏と固
く連帯して、今こそ、狭山上告審闘争勝利の
ために前進しなければならない。我が同盟
は、革命的戦闘布陣の構築に向け、全力を傾
注するであろう。共に闘わん！

2・9-10 全国学生総決起集会報告

現在、国立大二・七倍を始め、早大、慶大

・日大等の私大、横浜大等の公立大を貫いて学費の連続的な大幅上げが強行されようとしてゐる。「受益者負担」の名の下のこの大幅値上げこそは、大学の帝国主義的再編―「筑波化」へのステップであり、個別資本の枠を越えた日帝の死活を賭けた権力―社会再編として存在するのだ。七〇年中教委審二三

回答申、七四年筑波大開校を通して路線化されたその内実は、アジア侵略―「列島改造」に見合った大学の再編、即ちハイ・タレントの効率的育成であり、地域再編の核としての研究学園都市構想―大学移転である。そしてこの財政的裏づけこそ大幅学費値上げなのだ。学費値上げ攻撃はそれのみにとどまらない。昨年の明大大学費闘争への機動隊導入―大量逮捕や、父兄会の全面的組織化に明確なように、「大学Ⅱ目的社会論」の下、大規模な学生運動の解体攻撃と同一不可分のものである。とりわけ今学費闘争に於て、東北大では、差別教官を中心に当局が積極的に右翼勝共連合を育成しつつ、中心活動家の指名大量逮捕―大量処分攻撃―ロックアウトが強行されている。また一月から二月にかけて、明大、日大

中大への右翼ガードマンの大量配置と、神田署―機動隊による神田―お茶の水―水道橋一帯の制圧に明確に示されるように、地区治安弾圧として、七〇年代先行予防弾圧攻撃がかけられているのである。

このような中で、二月九日、東京檜町公園に於て、医学連・京大同学会・東北大全〇連のよびかけによる、全国学生総決起集会が開催された。機動隊の厳戒下を突破し、全国から四〇〇〇の闘う学生を結集して、二時より

開始された集会では、冒頭、事務局からの基調提起に続き、全国の闘う諸団体からの発言がよせられた。なかでも我が社学同の索引する明大政経学生会執行部は、解体か飛躍かが鋭く問われる七〇年代後期学生運動の指針を鮮明に提起し、多くの共感をあびた。

すなわち、第一に日帝による破防法的治安弾圧の一切と、社共・革マル・4トロの社会排外主義への潮流的純化を断乎粉砕し、全国の戦闘的諸潮流を糾合して闘い抜かれた昨秋九・三〇天皇派米阻止戦―羽田武装進撃こそ、七〇年代後期本格的権力闘争の端緒を切り拓くものであったこと、第二に明大当局―日共による七六年学長制改悪―学費値上げ策動に

対し、この九・三〇の地平をふまえた我が革命派を中心に、I部Ⅱ部、三地区を貫いた新たな戦闘陣型が形成されつつあること、第三に明大政経学生会は農学生会と共に、決戦期ともいえる七六年明大闘争を牽引し抜く中から、学生運動の新たな飛躍を戦取するであろうこと、以上の三点を明白に訴えたのである

諸団体へ発言をおえ、ただちに防衛庁・文部省へ向けたデモが開始された。このデモの戦闘的突出に恐怖した機動隊は随所でテロ・リンチ等暴虐のかぎり尽くし、三名の学友を不当にも逮捕し去った。しかし全国の戦闘隊列は、かかる弾圧を粉砕し、実力進撃として終始戦闘的に貫徹されたのだ。

続く一〇日には、九日の東京集会をふまえ、仙台―東北大で全国総決起集会が開かれ、大量逮捕―大量処分攻撃をもって学生運動の解体に奔走する東北大当局・国家権力への、全国の力を総結集した断乎たる実力闘争が展開された。

三里塚闘争、最終決戦期に突入す！ 2・22現地総決起集会報告

全国の同志、闘う労働者人民諸君！

三里塚闘争は、今まさに十年余に亘る闘いの全地平を賭けた決戦の時を迎えんとしている。激動の六〇年代後半以来、常に日本階級闘争の最前線を担い続けてきた三里塚闘争の蓄積の一切が今問われるとあって決して過言ではないのだ。即ち、一月十九日、三木の

「二月中に燃料問題に決着をつけ、年内に開港する」という言明に象徴的な如く、日帝は、二期期を突破口とする最終的宣戦布告を行なう、具体的には、三里塚の田畑を分断し、十年余に亘る闘いの象徴である岩山大鉄塔を破

このような二月九日、一〇日の闘いを通し、とりわけ我が革命派の登場と全く対照的だったのが場ちがいにも集会にもぐりこんだ第4

インターの諸君であった。彼らはあるうにか「学費闘争は生活防衛闘争だ」などと社共革マルなみの社会排外主義の腐敗、墮落した姿をさらけだし、さらに「内ゲバ主義反対」を叫ぶことによって自己の反革命性を合理化しようとしたのである。無論こうした4トロに対しては、我が社学同のときすまされた批判を皮切りに4トロを除くすべての集会参加者から鋭い批判とヤジがあびせられたことは言うまでもない。

二月九日―一〇日の闘いは、日帝の大学再編と学生運動解体攻撃のなかで、文部省、さらに攻防の熱い環となっている東北大へ全国の闘う力を集中したものととして大きな意味をもつといえよう。しかしそのみでは不十分である。戦後民主主義左派としての「層としての学生運動」はすでに歴史的使命をおえたのであり、集会での多くの発言にも示されたように鋭く政治傾向こそが問われているのである。学生戦線こそは階級闘争の諸傾向が最も先鋭的に反映される場であり、逆に言えば権力闘争―党派闘争の修羅場を通してこそ、学生運動の新たな飛躍は可能となるのだ。

我々は、社学同を中軸に、マルクス・レーニン主義で武装された党―プロ陣型をもって、明大を先頭に全国の闘う学生と共闘しつつ予防反革命弾圧と、スタ、反スタトロッキズムとの権力闘争―党派闘争の同時一体的展開の中、七六年を学生運動の新たな飛躍を克ちとるであろう。

こそぎ庄殺せんとしているのである。こうした日帝による「最後のあがき」的な反動攻勢の中で「開港絶対阻止」の確信をますます深め、全同盟を挙げ開港策動を粉砕することを宣言した反対同盟の呼びかけに

二月二二日、我が共産同の組織する権力闘争陣型―労働委・都学活の真紅の隊列を先陣とする全国の革命勢力は続々と三里塚現地、岩山大鉄塔の下へ結集した。その数五千五百余、三里塚空港粉砕、鉄塔死守の決意は会場―元岩山小学校校庭に充満したのである。

更に、この日、三里塚闘争に於いても、他の戦場と同様、二つの潮流が存在することが明らかとなった。即ち、我が同盟を主軸とする圧倒的な革命派―権力闘争派と孤立し、動

揺する四トロロ社会排外主義潮流の鮮明なコントラストがそれである。一時から開催される集会の間際になって、そこそ会場にもぐり込んだ四トロロに周囲四方から浴びせかけられた鋭い批判と適確な野次、更には解散前に鉄塔下で行なわれた集会に於いてなされたそのデタラメ極まる発言、例えば「三里塚闘争は生活防衛闘争」とか「内ゲバ主義反対」に名を借りた革命派への敵対に対し、正当にも「社共革マルと同じじゃないか」「清算主義！日和見主義！」「開港阻止など口先だけじゃないか！」等々の非難の渦が巻き起った事実は、我が同盟の革命性が如何に大衆的基盤を獲得しているかを示すと共に、四トロロの社会排外主義の本質を暴露し、かかる潮流が不可避免的に歴史のくず籠にほうり込まれることを冷厳に示したものであった。

四トロロの広がりが如く、三里塚闘争が「生活防衛闘争」一般としてしか存在してこなかったとすれば、「成田新国際空港」はとうの昔に日本の「玄関」となっていたに違いない。確かに「土地を守れ」という闘いから三里塚闘争は出発した。しかし、強制測量粉砕闘争、第一次代執行粉砕闘争に於いて現出したバリケード砦とその周辺の闘いが示したものは決して「生活防衛」云々のレヴェルに押し止められるものではない。「土地を守れ」から出発した闘いが第二次ブントを始めとした反戦全学連の戦闘的翼との結合の中で獲得してきた質―生活総体をとりにんだ敵権力との永続的対峙へのラセン的發展の質こそが重要なのだ。この發展の質こそが七一年九・一六東峰十字路に於ける機動隊殲滅線へと引きつがれていったと云わねばならない。この東峰武装闘争は、四トロロの主張するが如く「一部はね

あがり分子の暴挙」などでは決してない。反対同盟と支援の労学が「防衛」的闘いから、敵権力を追い詰める攻撃的布陣を形成したと、それによって機動隊を逆包囲し、殲滅する軍事的勝利を獲得したこと、東峰武装闘争はまさにかかる革命的意義を有しているのだ。しかし革命勢力の圧倒的な攻勢は反革命の反動的凶暴性を呼び起こす。青行隊を中心に我が同志をはじめとした五五名に及ぶ大量起訴―破防法的治安弾圧というその後の権力からの報復攻撃は、権力が「三里塚」を「革命の温床」と認めざるを得なかったことの逆証以外の何者でもない。だが、そうした敵権力との激烈な攻防関係は「左翼」内部から革命を放棄し、「組織された暴力」を否定し、社会排外主義へと転落する部分を生み出さざるを得なかった。他ならぬ四トロロがそれである。彼らが九・一六の否定を口走った時、彼らの本質は端初的に暴露されたのであり、以降、彼らは現在に到る迄、とどめのない転落、社会排外主義への加速度的純化の過程を着実にたどっている。今次総決起集会に於いて暴露されたのも当にそれ以外の何者でもなかったのだ！

三里塚闘争は、今、燃料問題を中心に千葉、茨城へと波及している。昨年七月二〇日の千葉市、バイブライン沿線住民一万余名による工事差止め提訴に端的な波及状況の中で、日帝―政府公団は、鉄道輸送への切り替えを画策すると共に鹿島地区の反対運動への買収、恫喝による切り崩しを図っている。かかる政府公団の陰謀と軌を一にして、昨年九・一五、成田市職・鉄労・日航労を中心に「早期開港促進集会」が開催された事実、また、昨年八月京都に於ける反原発集会以「住民闘争が三里塚のような非妥協的暴力的闘争にならない

ようにする」と主張する階級協調派が浮上した事実等の示すものは何か?? 云う迄もなく、それは三里塚闘争、更には全国住民闘争が、現在、不可避免的に「革命か反革命か」「武装闘争か階級協調か」を問われる段階に突入したということ、その一点である。

とりわけ現在三里塚闘争は、その蓄積の中で、空港建設の意図が、交通・運輸・軍事網の再編に止まらず、農村解体―新全総の先取りであったことを見抜き、帝国主義農政―農振法に対決する新たな質を持ってきている。我々にかかる新全総―帝国主義農政に対決する農民の闘いとして、そして空港粉砕、鉄塔防衛闘争を九・一六闘争の継承の上に、東峰統一公判闘争と結合して闘い、それを突破口に全国住民闘争の革命的転換を克ち取らねばならない。

我が同盟と権力闘争陣型―労働委・都学活は、今集会に於いて確認された「空港粉砕―鉄塔死守」を断乎堅持し、二、三月期に於ける鉄塔破壊道路建設を何が何でも阻止し抜く決意である。そしてこの闘いをとば口に、社共革マルは云うに及ばず、四トロロに代表される「革命的左翼」内部の社会排外主義潮流を容赦なく粉砕し抜くことを弾機として、三里塚闘争勝利の展望を切拓き、併せて全国住民闘争の革命的、武装的發展を克ち取る決意である。

全ての労働者人民諸君、あらゆる日和見主義、経済主義、待機主義を打破り、日帝―政府公団との持続的臨戦体制を堅持せよ！我が同盟は可視、不可視を問わずあらゆる戦場で諸君と共にあり、諸君の最先頭で闘い抜くであらう。

天然ガス闘争の指針―排外主義解体へ

全国の同志、闘う労働者人民諸君、

七五年秋より三多摩各地で連続的に起きたガス事故への大衆的憤激は、一人の主婦の天然ガス転換拒否に始まり、現在もなお各地の「住民」による反対闘争として受けつがれ、展開されている。我が同盟の不抜の拠点、明大生田地区に於いても、権力闘争陣型―関東労働委に結集する生協労働者を中軸に「明大

となった苛酷な弾圧に対し、部分的ではあれ突出した闘いを展開した結果、闘いの社会的波及性の端初を獲得した。しかしながら、その部分性の故に国家権力の被護を受けた独占資本、東京ガスの圧倒的物質力に対し、地域的陣地戦、遊撃戦で対峙し抜くだけの指導の質と戦闘陣型を獲得し切れず、闘いは未だ萌芽に止まっている。

一多摩地区天然ガス転換を阻止する会」が形成され、一ヶ月以上に及ぶ東京ガスのガス供給停止攻撃を粉砕し、現在もなお粘り強い闘いが展開されている。

国立にはじまる「住民」と東京ガスとの闘いは、国家権力機動隊、右翼ガードマン一体

東京ガスは、何故「住民」の声を無視し、反対運動を国家権力と一体となって弾圧して迄、天然ガス転換を強行するのか？答は明白である。其処には徹底した大衆収奪（「受益者負担」の美名の下に）による独占資本の階級的延命の論理が存在するのみなのだ。ベト

ナム、パレスチナに於ける革命戦争を最先頭とした六〇年代後半より打ち続く国際的階級流動の中で、IMF・ガット体制を基軸とした帝国主義者の戦后的世界支配秩序は根底的動揺を余儀なくされた。かかる動揺の中で、必然化した構造的不況（インフレーション）の乗り切りと激化する階級矛盾の押え込み―新たな国民統合環の設定をかけて日帝は様々な権力―社会総再編を画策している。七四年の「作られた資源パニック、石油危機」を媒介としたエネルギー政策の改編は多様化もその一つと言わねばならない。かかる過程において日帝は原子力発電の頓座ともあいまち、天然ガスの位置を極めて重大視するようになったのである。政府のエネルギー政策によれば、天然ガスの輸入量は八五年迄に現在の十八倍、

実に十八倍に増加せんとしている。こうしたエネルギー政策に基づき、現在の「強行転換」は行なわれているのだ。では、転換に際しての諸経費は誰によって負担されるのか？天然ガスの開発費、液化プラント、受入設備等を巡る巨額の費用は誰のふところから捻出されるのか？云々迄もなく「消費者」によってある。「安定供給」なる空論を駆使した「受益者負担」の論理によってである。更に、備蓄の困難な天然ガスの供給先は一体、何処に求められているのか？インドネシアを中心とする東南アジア諸国である。ベトナム以後の日帝国際戦略の主要環が東南アジアにあること、田中「列島改造論」以来、国内再編が常に東南アジアを射程に入れてることを踏まえるならば、このことは極めて重大であると云わねばならない。天然ガス強行転換は「公共的企業」＝東京ガス資本の反革命的な本質をもの見事に暴露する。即ち、労働者階級上層部の買収に始まり、他民族抑圧と差別分断に物質的根拠を置く独占資本内労働者の排外主義への日常的動員体制を基礎として、各「家庭」に「天然ガス」という名の「排外主義」を送り込むもの、これこそが帝国主義本

みどり生協闘争報告

全国の同志諸君!!「遊撃」読者諸兄弟!!
現在、神奈川の地で不屈に闘い抜かれていく戦闘的労働者の闘いを報告し、その闘いへの支援と連帯を求め、同時に労働者階級の共同の事業の達成に向け闘い抜く決意を明らかにしていきたい。

既に「遊撃」新年号で報告されたみどり生協労組の闘いは、解雇完全撤回に向け、戦闘宣言を発して以降、着実にその実践を貫徹してきている。

二月三日、神奈川県下の闘う労働者・学生の圧倒的結集の下、みどり生協労組総決起集会が開催され、打ち続いて十四日、生協本部(市ケ尾)糾弾闘争が展開され、この闘いの前進が着実に勝ち取られていることが満天下に明らかとなった。

三日、夕刻、職場、生産点での解雇撤回闘争を長期に亘り闘い抜いている仲間、革命的労働者の今日の任務を日常不断の同盟-JCとの対決の中で確固、不拔なものにきたえあげている友人、又、戦後民主主義的運動構造の中での生協の歴史的使命の終焉と腐敗に抗し、階級闘争の復権を大胆に掲げ、闘いを展開している生協労働者等々の総決集の下、集

国に於ける「公共」の本質なのである。

三多摩以来の天然ガスを巡る闘争は、こうした「公共性」の欺瞞を端的に突破する「住民運動」の戦闘性を個別的にはあれ獲得している。しかしながら、我々はこの個別的戦闘性が、ともすれば個別闘争の徹底化論へ、則ち個別闘争、改良闘争の戦術的左傾化のみによって革命的陣型が形成されるという夢想へ陥る傾向を孕みがちであることも明確に指摘しておかねばならない。無論、我々は個別闘争の徹底化自体を何ら否定するものではない。むしろ、我々は徹底化する為には何が必要なのかを問うているのだ。今日の日帝による露骨な排外主義、差別分断攻撃は、それが革命の側の攻撃に起因するものであるが故に、労働者階級人民内部に「革命と反革命」の構造を不可避的に強いている。「住民運動」「消費者運動」と云えど決してかかる構造から自由ではないのである。であるが故にこそ、排外主義との日常的闘い、自らのよってたつ「消費者意識」更には「改良の果実」の内に孕まれる排外主義的傾向との日常不断の闘争を経ない限り、換言すれば個別闘争を不断に権力闘争へ解放する目的意

会は終始、戦闘的フニキで最後まで貫徹されたのである。この集会において、我が同盟の権力闘争陣型、労働委の同志は、この解雇攻撃の性格の全面的暴露と支援の強化、労働者の闘いの前進に向け、以下の事を提起した。

解雇攻撃は、単に闘いに対する偶然的事実としてあるのではなく、既に生協連からの九州七単協の除名攻撃に表現されている如く、又、同質的な闘いが自然発生的に各生協職場に於いて闘われているように、帝国主義者の攻撃に屈服し、自らの先行的支配を貫徹せんとする社、共等の反革命的攻撃に対する、組織された階級闘争としてこそ、このみどり生協の闘いがあること、そして、社共との路線的分岐が大众的にいよいよ鮮明になってきていること。更に「革新」自治体の戦略的拠点としての闘いとして、例えば「教師聖職者論」「自治体労働者奉仕者論」・75春闘での「国民的合意」等として現出している労働者の階級的団結の解体、人民の排外主義的動員構造形成に向けた攻撃との根本的対決が迫られていること、それには労働者の独自の闘いの貫徹と住民に対する分岐形成・団結強化の闘いが一個二重のものとして要請されていること。

識性をもち得ない限り、帝国主義者によって「改良の果実」を逆手にとられ、自ら排外主義の動員構造へ転落することになりかねないのだ。「住民運動」「消費者運動」に今日最も問われているのは、かかる排外主義との粘り強い闘争を通し、「革命か反革命か」かの明確な分岐をその運動内部に大胆に提起することによって革命派の権力闘争派の戦闘陣型を強化、拡大すること、この一点に尽きっていると云っても決して過言ではないだろう。

我が同盟の領導する明大生協労働者を中軸とした天然ガス闘争に於いても以上の点は今後、闘争の発展に伴いますますます厳しく問われてくる。生協が大学の末端管理厚生機関の位置を占めるのか、それとも闘う労働者、学生の革命の砦となりうるのか、天然ガス闘争がかかると鮮明な分岐の鍵を握る重大な闘争であることをはっきり重振えねばならない。

全ての労働者人民諸君!!我が同盟と権力闘争陣型-労働委、都学活は、こうした重大な意義を持つ天然ガス闘争を、明大に於ける闘いを突破口に全国津々浦々で展開し、その最先頭で闘い抜く決意である。

このことを鮮明に提起し、併せて、支援組織が、産別、地区を貫く闘う労働者の結集体として、大衆の実力闘争を断乎堅持し、かかる階級的任務の実践を通した不断の検証を行うことがますます肝要となつてきていることを明らかにして、以降の闘いを粘り強く闘い抜く決意表明を一点の曇りもなくし切つたのである。

既に前身で報告した通り、みどり生協労組の闘いは、75春闘過程における「賃金・労働条件の根本的改善」を掲げて実力闘争を闘い抜いた労組に対し、恐怖した「理事会」＝社会党の東京生活クラブ生協と一体となつたなりのふりかまわぬ攻撃としてその発端があつた。その労組破壊策動は六月「総代会」席上に於ける暴力行為なるデッチ上げの口実の下、労働員七名への解雇攻撃として現出したのである。かかる労働者の存在自体を抹殺せんとする凶暴な攻撃に対し、労組は当然にも労組は闘争拠点の確保-二支部(高津・鎌倉)占拠と本部包囲糾弾、支える会津設をもつて反撃を開始した。従つて、この闘争は「国民党」を闘争拠点として排外主義と差別・分断を自らの存在の基礎として、純化せんとする「革新」政党とその下に於ける帝国主義労働運動派への激烈な党派闘争として闘い抜かれてきた。つまり戦闘は、社会党・理事会・党員協による陰然

公然たる攻撃、例えば鎌倉地区労指導部による「みどり生協（理事会）支援決議」、国労大船工場労組の仮事務所（生協理事会への）貸与等を通じた闘争破壊攻撃を一つ一つ打破るものとして存在したのだ。更に社会党「理事會」は、労組に対する反動的攻勢を「みどり生協組合員のつどい」の組織化と併行して、二名復帰、五名退職、和解金五百万円の提示により開始せんとしてきた。例年、四月に予定される「つどい」を急拠十一月にもつてきた必然性は「労組の闘い」に対する決着として、「労組破壊―解雇」の承認のとりわけと、「組合債」の強要による「危機」の反革命的克服を画策せんとするところにあつたのだ。

こうした対峙の煮詰りに対し「和解提案」を断乎として拒否し、解雇の完全撤回まで闘い抜く姿勢をより鮮明に打出した労組―支援は戦列を強化し、反撃の第一歩を彼らに対する

糾弾として戦闘的に闘い抜き、同時に組合員諸氏に対する労働者の闘いの位相を明らかにし撰択の規準を打ち出していったのである。

このことは実力闘争を根幹に据えた長期戦闘体制の構築と二支部バリケード占拠の強固なる打固めと現下の階級攻防戦の只中に於ける労働者階級の闘いの位相を不断に明らかにするための激烈な路線論争と組織的実践に裏打

らされはじめて克ち取られていったことは言うまでもない。

二月三日、十四日の闘いはまさに以上の如き闘いの更なる深化と拡大に向け克ち取られたのだ。このみどり生協労組の闘いは76春闘を目指し、全国で闘い抜いている同志の諸君と共に更に突進していくであろう。我が同盟はその最先頭で闘い抜く決意である。

共産主義者同盟政治理論機関誌

三月下旬発売 予価千五百円

ボルシェヴィキ創刊号

内容

★マルクス・レーニン主義革命党建設へ

★国際共産主義運動総括 沖田友士

更に前進せよ

★天皇制・軍事武装・沖繩・部落・女

★資本主義・帝国主義批判と唯物史観

解・破防法・労働戦線・学生運動・

山下 誠

生協―住民運動

共産主義者同盟游撃編集委員会

反帝社会主義の旗の下へ 革命派の侵略反革命の 労働運動の構築を

全国の革命的同志諸君！ 日々資本の抑圧

革命派の前進を前にして、帝国主義に救いの

不可避である！

と暴虐に抗し闘い抜いている戦闘的労働者諸君！

手をのばし、帝国主義との協調に甘い期待を

全ての革命的同志諸君！ 準備せよ！ 帝

国主義時代の日と見主義たる社外排外主義者は、

帝国主義時代の日と見主義たる社外排外主義者は、

帝国主義者ちに準備せよ！ 部置に着け！ 帝国主義者の

の時代であり、国家権力を巡る闘い、すなわち

の時代であり、帝国主義の社会的支柱であり、文字

の野望を一つ残らず粉砕せよ！ 日本帝国主義を打倒せよ！

権力闘争の勝利の帰趨をかけた闘いへの突

通りの意味で、ブルジョワジーの手失であり、

日と見主義者の甘い期待を無慈悲に打ち砕け！

入の時代であることをしっかりと銘記しよう

改良主義と排外主義の眞の伝達者である。この

無慈悲に打ち砕け！

ではないか！

の社会排外主義勢力の登場は、それ自身歴史

九・三〇天皇派米阻止戦闘を頂点とする昨

現代世界の基調はプロレタリアートの攻勢

の必然であるが、これとの対決は革命派にと

秋期階級攻防戦を日本階級闘争の最前線と闘

と、それへの帝国主義の死活を賭けた反革命

って決定的に重要な任務である。

い抜いた共産主義者同盟は、この間、その全

巻き返しとの、全世界的規模での激突の時代

この日と見主義・社会排外主義者の登場は

ての成果を党と党の戦闘陣型の建設に注ぎ込

である。われわれは、この闘い、この地平か

時と場合によって、その形を変えることはあ

み、確実に我がものとしてきた。この我々の

ら一歩たりとも退くことは許されない。我々の

れ、まさしく世界的趨勢である。「歴史的大

何ものにもかえがたい偉大な前進を、一歩足

の退却は帝国主義の侵略・反革命を許し、革

妥協」「保革連合」こそがそれであるがこれ

りとも清算することなく、巨大な物質力に転

命の「死」を意味するものに他ならないから

らの社会排外主義・帝国主義翼賛体制の一挙

化し、力とし、前進せよ！ 春季階級攻防戦

だ。

的全面開花こそは帝国主義の危機を救済し、

をその第一弾として戦取せよ！

だが、しかし、この帝国主義の一切の野望

革命派に敵対することをその唯一の特性とす

るものであるが故に今や、革命派との激突は

を打ち砕き、完膚なきまでに打倒せんとする

るものであるが故に今や、革命派との激突は

るものであるが故に今や、革命派との激突は

革命的プロレタリアートの前進と日帝の侵略反革命

ベトナム・インドシナを先頭とする全世界の規模でのプロレタリアートの前進は、それ以後も、アンゴラ・モザンビークにおける解放闘争の前進を勝ち取り、帝国主義の民族分断支配やバルト・ヘイト（人種隔離）政策を打ち破ってきた。しかもこの反帝民族解放闘争は同時に社会主義との結合を深めているところにその特徴性があり、しかも、このような民族解放闘争・社会主義革命闘争の前進に呼応した帝国主義本国内における革命的プロレタリアートの決起と、その闘いはますます持続的なものとなり、深化し、拡大している。

帝国主義は、このように国内のみならず、全世界の規模での革命的人民の決起と攻勢を前にして、必死に反革命的巻き返しを策している。国際的には米帝の反革命戦略を軸にして、一方でスタ国家の協調のもとに反革命秩序の維持と安定をその至上命題とし、国内的にも公認「前衛党」と体制内労働運動の協力をとりつけ、一方で革命党と革命勢力・革命思想に対する徹底した弾圧の強行がもくろまれ進行しているのだ。我々がこの間、破防法社会化攻撃として把え、反撃を展開してきたところのものはそれである。

まさしく、帝国主義は自らの危機を革命派に対する残酷な弾圧と労働者大衆に一切の犠牲を転嫁することによって延命の道を確認せんとし、そのために植民地収奪によって得た巨額の超過利潤をもって労働者階級の上層を公然と、または陰然と買収し、抱き込むのである。この帝国主義に買収され、懐深く抱きこまれた「労働貴族」層こそは帝国主義の主要な社会的支柱に他ならず、それこそが帝国主義社会、社会排外主義潮流に他ならないのであるが、この帝国主義社会は、たとえ口先で、どんなに、いさまして闘うポーズをとり号令をかけようとも実際は労働者大衆に資本への協力を呼びかけ、帝国主義の侵略・反革命体制に労働者大衆を動員せんとするものに他ならないのだ。

現在、日帝のアジア侵略反革命をめぐる情勢はかつてなく緊迫度を強めており、日帝心臓部の革命的プロレタリアートにとっても、その闘いの一大飛躍を要求するものである。とりわけ現在、アジアにおける革命と反革命の激突の熱い焦点となっている朝鮮半島をめぐる情勢、すなわち「韓国」朴反共軍事独裁政権及びそれを押したる米日帝国主義反

革命同盟と、革命的朝鮮人民の英雄的決起との激突こそは日本帝国主義本国の労働者階級にとって口先きでの「連帯」ではなく自らの生死をかけた自国帝国主義打倒に向けた闘いを要求しているのであり、そのことが革命的朝鮮人民との国際主義的連帯を可能とするものである。

朝鮮半島をめぐる情勢の煮つまりは米日帝國をして反革命臨戦体制の一層の緻密化と強化に突き進ませている。

在沖米軍による伊江島での核模擬弾の演習や実弾射撃訓練、更にはベトナムでのジャングル戦を想定した演習から山岳演習への転換等は、はつきりとその目標が朝鮮半島に向けられていることを示しており、日帝もまた、在日米軍に対する後方支援と米軍基地の安定的使用の最大限の便宜を計ることを明言しているのだ。このような朝鮮半島をあらゆる射程にいられた反革命臨戦体制の構築は、その共同反革命戦争司令部としての「日米防衛協力委」設置に向けた日米安保協の開催としてより現実的、具体的に策動されている。

また、南朝鮮人民の朴政権打倒に向けた革命的決起の鎮圧と朝鮮半島の南北分断固定化を己れの権益のために不可欠とする日帝にとって、朝鮮人民の決起と呼応する在日朝鮮人民の英雄的・革命的闘いこそは死ぬほど恐れるものである。この在日朝鮮人民の闘い的一切を封殺し、日常的生活のすみずみに至るまで監視し、規制を強めようとしている。在日朝鮮人民に対する二大弾圧法規といわれる「出入国管理令」と別名「在日朝鮮人登録法」とも呼ばれる「外国人登録法」こそはそれであり、現在これを更に改悪せんと策動していることを断じて見過ごしてはならない。

また、今回曝露されたロッキード汚職も、

76春闘の階級性格と革命的労働者の任務

資本が構造的不況のもとで、出口もなくあがき苦しむ、同盟、JCから総評・民間、日共に至るまで、口先きでの勇ましさと裏腹に、それらのうちのどれかが全て、帝国主義に協力はしても対決することなどは考えてもみならず、労働者大衆への社会的悲惨の集中を黙認はしても、何一つとして事態の根本的解

単なる商道德の問題ではなく米日帝国主義の反革命同盟の構造的産物に他ならない。その意味で日本における真相解明の「遅れ」（隠蔽）に対して「アメリカ民主主義の進歩性」を賛美するなどは的はずれもはなはだしと言わねばならず、ましてや、これを機に武器国産化へと進もうとする日帝の思惑をも許してはならない。

さて、すでに明らかにしたように一切の問題が革命と反革命の選択をせまられ、回答を余儀なくされる時代として今日の階級闘争の性格を特徴づけるならば、革命派の任務はきわめて明確であると云えよう。それは革命派と反革命との境界線を明確にし、労働者大衆を社会排外主義指導部と明確に切り離すことであり、そのためには、社会排外主義潮流との激烈な党派闘争を貫徹することである。しかも、この闘いを党と党の戦闘陣型を中軸とした革命的政治闘争として組織し闘い抜くことである。民主主義位相における諸々の闘いをも民主主義運動としてではなく党的基準において再組織していくこそは革命派の重要な任務であり、そのことを可能とする包括性と厳密性が党指導の内実として要求されているのだ。

全ての戦闘的労働者は党と党の戦闘陣型に結集し春季階級攻防戦を闘い抜かねばならない。この闘いの質をもって大胆、かつ緻密に細心の注意を払って職場・地域に登場し、帝国主義の一切の現れに対する宣伝・煽動・暴露の闘いを強めていかなければならない。

とりわけ、七六春闘過程においては帝国主義労働運動解体に向けた闘いをより一層強化し、民同の労資正常化路線の本性を余すところなく暴露し、労働者大衆をその指導のもとから解き放ち、革命派のもとに糾合する闘いを圧倒的に押し進めなければならない。この七六春闘の全過程を貫いて、帝国主義の侵略反革命と対決する革命派の労働者運動構築に全力をあげねばならない。

決への道を明らかにしえないことが明白となるこの七六春闘過程こそは革命派にとっては絶対のチャンスである。資本に救済の手をさし出すのではなく、更にその危機をドロ沼化させ、既成労働運動の無力さを「左翼的」に補完するのではなく、その無力さ、ふがいなさを徹底的に明らかにし、無慈悲に追いつち

をかける闘いこそが革命派の緊要の任務なのだ。

今、七六春闘はその意味できわめて鋭い政治的分岐点としてあり、労働者人民に資本との階級協力の道を歩むのか、さもなければ、階級対立かの選択を迫る分水嶺としてあるのだ。

「対話と協調」を掲げて登場した三木内閣がハト派を装いつつ、その実、アジア侵略・反革命の道を邁進していることは今や明白である。侵略・反革命体制の整備・確立に「野党」の協力をとりつけ、階級協調の名のもとに労働者大衆を帝国主義政治のもとに動員せんとするのが三木内閣の使命なのだ。

三木は、この構造的不況の中で、一切の犠牲を労働者大衆に転嫁すべくその本領を發揮せんとしている。一月二十三日、国会における施設方針演説においても、現在の不況からの脱出を「国民総ぐるみで英知をしほり、協調の精神を發揮してこの困難を突破する覚悟を持たなくてはならない」と述べ、また、「国防」に関しても、「第一は国民の抵抗の決意だ。……その決意の現れが自衛隊だ。第二は堅実なる国内体制確立だ……」として、このために「一身を投げうって」突き進むというのだ。これは、労働者大衆は自らの犠牲をもって救済のために協力せよ、そのためにはインフレによる生活苦がまんせよ、と言っているにすぎず、しかも「国防意識」の登場につとめ侵略・反革命戦争にも協力せよ、それと同時に国内秩序をみだすことなど決してなく、帝国主義的秩序の確立に努めよ、と勝手なごたくをならべているのだ。まさしく、三木内閣の本領の一切がここにあるのだ。

我々はこれまでも繰り返し三木内閣のこの本質、すなわち階級和解（協調）政策と、それをもってする帝国主義攻撃の一切を暴露してきた。それは決して「ハト派の三木がタカ派の田中の政策を承認している」などという類の談論風政治論議などではなく自民党政府のそして日帝の侵略・反革命としての本質を、しっかりとつかみとってきたのだ。

この三木の施設方針演説と呼応して発表されたのが日経連の賃上げ「誘導目標」である。七六春闘の賃上げを「ゼロまたは一ケタ」とするこの日経連の「賃金研究委報告」は「賃上げの仕方いかんによっては大きな失業が表面化するおそれがある」として恫かつかつ、「賃上げについての発想の転換」を迫り、露骨に賃金抑制政策を強行せんとしているのだ。そこでは「支払い能力に応じた賃上げを考慮すべきであり、それ以上の賃上げは職場の存続を危険に陥し入れることにならざ

るをえない」「実質賃金と雇用の維持向上のために労使協力して職場防衛に努める必要がある」と驚くばかりのあつかましさをもって労働者大衆への犠牲の集中と資本への協力をしているのだ。しかもこのあつかましさはこれだけではなく、「石油ショック」の際の大独占企業に対する社会的批判の集中に対し

「これは大きな誤りである。企業が利潤をあげずして政府は、いかなる政策も展開できないし、利潤なくして企業は配当も新規投資も雇用の維持拡大もできるはずがない。」と美事なばかりの居直りを見せ、石油ショックは「産業はもちろん国民経済全体が被った痛手であり、国も企業も個人もひとしく分担せざるをえない苦痛なのである。」と資本の矛盾が労働者大衆の責任にされてしまっているのだ。冗談ではない、労働者大衆が資本の矛

帝国主義労働運動解体、民同労使「正常化」路線粉碎の更なる拡大を

しかし、この日帝の一切の犠牲を労働者大衆に転嫁すべく賃金抑制攻撃を浴びせかけ、しかも階級協力を呼びかけるという厚かましい攻撃（それが帝国主義者の本質なのだ）に積極的に応じ、資本になりかわって、あからさまに労働者に我慢を説き、労賃協力を説教するものがあることを見逃がしてはならない。そして、これこそが帝国主義派労働運動であり、同盟・JC派なのだ。

この帝国主義派労働運動の頭目たる同盟は、その「七六・七七年度運動方針」において労働組合が「社会的責任の自覚に立った行動」をし、「国民的視野から調和をはかること」を主張している。そして、「わが国労働運動は、観念的な左翼労働運動では対応できない厳しい情勢を迎えている。」という見解を表明している。しかも、その内容たるや、「新しい経済秩序の建設」に向けて、より機能的な資本主義を確立せよという代物であるが、更に続けて「わが国労働組合の半数は……中立性の立場に安住しているのは遺憾であり、脱皮を期待する」と述べている。要するに「ムチャな賃上げは資本の危機を招く」として労働者に我慢を説き、しかも他の労組に対して、より積極的に反共親帝の立場に立った労働運動を展開するよう呼びかけているのだ。「新時代への挑戦」と銘打ったこの運動方針こそは、帝国主義の侵略反革命と反帝社会主義革命との激突の時代における帝国主義派労働運動の側からする「決意表明」である。

このことは同盟の七六春闘の基本方針が徹頭

盾と危機を肩がわりする必要が一体どこにあると云うのか、資本主義が今や構造的矛盾のなかであえぎ苦しんでいるならば、労働者大衆には、そのすみやかな「死」に向けて徹底的に追いつちをかけ、確実に息の根を止める義務があるのみである。

労働者諸君、日帝は今、侵略反革命体制の最後の確立に向けて一挙的、強行的にその再編を押し進めようとしている。不採算部門を切り捨て企業合併を推進し、高価格体系への移行と賃金抑制をもって独占の利潤を拡大し、しかもこれに反対する革命派を徹底的に弾圧して、という具合にである。

労働者諸君、資本のもくろみに手を貸してはならない。資本に協力するすし合いなどは、これっぽちもありはしないのだ。

徹尾労使協力に貫ぬかれ、資本の「安定的成長」のために労組も積極的に参画することを強調していることにも明らかである。

この同盟は、その系列下の労組が政府に国産武器の輸出を進言しているということは周知のことであるが、また、同盟は今年になって「多国籍企業対策」なるものを発表した。

「新しい国際経済秩序の創生を求めて労組の国際行動を強化せよ」とのスローガンを掲げたこの「対策」の中身たるや企業に対する対策ではなく侵略企業と闘うアジア人民への対策に他ならない代物である。そこでは「円滑な海外進出」の基準を設定し、「海外援助による救済」であるとか、いかにして「現地でのトラブル」を避けるかといった類いのことが述べられているのだが、帝国主義者ですら自らの侵略反革命にそれ相應の「人道的」装いをこらすものであり、この程度のことには言っているのだ。これこそ同盟が帝国主義派労働運動の頭目であるゆえんであるが、この同盟支配との闘いは、その内部からの反乱が今や着々と準備されつつある。この同盟内反乱を拡大し、同盟執行部の暴力的圧殺攻撃と闘うことこそは個別経営内での闘いとどまるものではなく、日帝の侵略反革命と闘う全国の戦闘的労働者の任務なのだ。

さて、同盟・JC等の帝国主義派労働運動の動向に関しては一定明らかになったであろう。では、総評・民同は今春闘に対して如何なる内容をもって臨もうとしているのかを次に明らかにしていこう。春闘共闘委の方針を

みるかぎりにおいては、そして同盟のそれと比較するならば、なにかしら一定の闘い姿勢の如きものがあるかのごとくである。しかし、より仔細に検討するならば、その本質もまた、たちまちに明らかとなるのである。

「七五賃金闘争は全体としては敗北であった」とする、率直な、な総括から出発する、この「一九七六年春闘白書」は二十万人をこえる未組織労働者の問題をとりあげ、「同じ日本の労働者でありながら、こうした格差が拡大していくことは労働者の階級的連帯性をそこなうばかりでなく、組織労働者の自己防衛の闘いすら階級内部の矛盾を拡大するものとなってしまふ。われわれの闘争が組織労働者のエゴイズムとしてうつりやすいのである。として自己の本工組合主義の本質を若干「反省」してみせつつ、だからこそ「国民春闘」路線の経承であるといっている。

しかし、この「国民春闘」路線こそは、すでに我々が再三再四批判しつくしてきているように、労使正常化路線のもとに、職場闘争を圧殺し、そのうえで制度要求を国民運動として展開しようとするものであり、体制内改良運動への純化以外のなにものでもないのである。事実彼らは「誰しもマイナス成長や不況が好ましいとは考えない。失業や操短がなくなり、安定した成長を求めることは当然である」と述べているのだが、これこそは民同の本音であり、彼らが資本主義の枠内での改良、すなわち、より安定した資本主義（より確実な搾取と収奪）を求めるものでしかないことを吐露しているのだ。すなわち、資本の危機に対して、積極的な墓掘り人になるのではなく、危機を救済する医者への努力をはたそうと云うのである。しかも、すでに総評・民同は政府・日経連の「ゼロまたは一ケタ」の賃金ガイドラインへの屈服を開始している。昨春闘において「雇用か賃上げか」の二者択一的攻撃に対して、結局、雇用も賃上げも確保できなかった彼らは「二十%、三万円前後」のアドバランとは裏腹に、すでに自ら賃上げ闘争の敗北を予期して、その言いわけづくりに入っているのだ。

二月十二日総評臨時大会での総評議長、市川の発言こそそれである。そこでは、「賃金闘争に偏重した労働運動は社会的進歩性を喪失する。」と述べ、なにかしら従来の本工主義的賃金闘争への「反省」の如く述べられてはいるものの、実は政府・日経連の賃金抑制攻撃への屈服を前に、手回しよく今から言いわけをしているにすぎないのだ。「企業内の労使関係のみを通して情勢をみるのは危険で

あり、賃金闘争に偏重した労働運動は賃金闘争それ自体の成果も期待できない。」（市川総評議長）として政策闘争に逃げこもうという腹づもりなのだ、この七六「国民春闘」の基調たる「賃金闘争と政策闘争の結合」なるものも、要するに一切を制度要求として吸い上げ、しかもそれを選挙による「野党」の議席増加に集中しようというものであり、議会内改良主義そのものなのである。

しかも、春闘共闘委の賃上げの論理に於ては、賃上げをしなければ労働者大衆は購売力がつかない、よって製品が売れないので不況を脱することはできない、という類いの代物であり、要するに「資本の安定成長を実現する」ためには労働者に購売力をつけなければならぬというのだ。これでは同盟の「生産性を維持するために賃上げ自粛を」という論理と、その目的とするところは同じことではないのだ。すなわち、資本の安定成長を前提とした労働運動（春闘方式こそはそれだ）は資本の攻撃の前には決定的に無力であり、賃金抑制政策に屈服し、資本の協力者たる位置につかざるをえないのだ。

このような総評・民同労働運動の本質はスト権完全奪還闘争に対する対応を見ても明らかである（游撃十四号参照）。民同指導部が昨年来のスト権完全奪還闘争のなかで意図したものは、職場実力闘争を背景とし、労働者階級の闘いの前進とその成果としてスト権を奪還することではなく、職場闘争を圧殺し、より一層民同官僚の統制力を強化することによって「労使正常化」を実現し、その報賞として「スト権」をもらうことであつたのだ。しかも、その内容たるや「条件付きでよい」と広言するに至っているように、徹頭徹尾、当局の前に自ら武装解除し、しかも国鉄再建への協力をも約束するというのである。

民同は昨年末闘争で「スト権条件付き付与」の御託宣を政府からもえなかつたのは、まだまだ政府・当局に対する協力が足りなかつたのだと総括して、鉄労よりも早く「国鉄再建への提案」を発表するといふ始末である。（鉄労はお株をとられたとばかりにあわてて発表したのだ。）

これこそが民同指導部の本性であり、徹底した労使正常化路線こそが、その全てなのだ。さて、以上政府・日経連の階級和解（協調）攻撃と、それをもってする賃金抑制攻撃について明らかにし、それに対する（協力する）同盟・春闘共闘委の対応を検討してきたのであるが、このように既成労組指導が、こぞって無力性をさらけ出し、そればかりか、資本

への階級協力を呼びかける犯罪的役割をも積極的に荷わんとしているとき、これらの既成戦線に何事かを期待することは絶体にできないことは明らかだ。であるならば、現在闘争的労働者に問われている闘いとは、このような既成戦線の「左傾化」に淡い期待を寄せることではなく、全く逆に、これら既成戦線の無力性、ふがいなさ、犯罪性を徹底的に曝き出し、それが資本と闘う気など毛頭ないこと、すでに資本への屈服を開始していることを徹底して明らかにしていくことでなくてはならない。労働者大衆をこのような既成戦線からひきはなし革命派の労働者運動建設に突き進むことではなければならない。しかもその闘いを党と党の戦闘陣型の建設として獲得しなければならぬ。既成労働戦線とはつきりと分岐を勝ちとり、党派闘争を貫徹することなしに革命派労働者運動の建設はありえないし、しかもそれは革命党とがっちり結びつき、その首尾一貫した指導性の発揮なくしては不可能である。このことは現在の運動の分散性と手工業性、更には組合主義・経済主義者の指導のもとに多くの闘いが未だ放置され、日むしばまれようとしている状況のもとにあっては、とりわけ重要である。

革命党の任務とは、労働者大衆の噴激を資本への反発の位相にとどめるのではなく、また、「革新」政党への集票運動に陥し込めるのではなく、資本主義を打倒する革命的階級へと高めあげていくこと、しかも、それを単なる啓蒙運動としてではなく労働者階級に資本主義を打倒する能力を獲得させることである。それは革命党の首尾一貫した指導と結合することによってのみ可能なのだ。

とりわけ、この七六春闘過程こそは、その条件がつかなく高まっていると言わねばならない。すでに述べた様に不採算部門の切り捨て、企業併合等の産業再編成は企業倒産や大量の失業者を生み出し、また、賃金抑制攻撃の強行はより一層の生活圧迫を結果とすることはすでに明らかである。しかもこのような資本の攻撃に対して既成戦線が全く無力であることをさらけ出すのも、また必然である。まさしく戦闘的労働者にとって七六春闘こそは革命派労働運動構築に向けたチャンスなのだ。

全国の戦闘的労働者は資本の危機を更に押しすすめ、ドロ沼化させ、最後の息の根を止めるまで闘わなければならない。そのためには全国に散在する戦闘的労働者の闘いを党の指導のもとにしっかりと結びつけ、その潮流の形成に突き進まなければならない。そのよ

全金本山闘争の現段階と革命的労働者の任務

うな戦闘的労働者の闘いの頂点に立つ闘いとして全金本山闘争を挙げる事ができるだろう。本山闘争は資本のありとあらゆる攻撃に對して階級的原则を貫き通して闘ってきた本山闘争とその勝利は、今や、ひとり本山支部だけの問題ではなく、全国の戦闘的労働者の課題であり任務である。今春闘過程にお

る戦闘的労働者の任務とは本山闘争の発展と分ち難く結びついているのだ。本山闘争の苦闘を共有し、全ての職場に本山闘争を持ち込む闘いこそは革命派労働者運動構築に向けた不可欠の第一歩である。本山闘争を基軸として全国の戦闘的争議拠点の闘いをしっかりと結びつけることこそは党及び戦闘的労働者の

緊要な任務である。しかもその争議拠点の結合は交流位相にとどまってはならないことは言うまでもなく、しっかりと党の戦闘陣型のもとに組織化されなければならないのだ。我党は今春闘過程においてこの任務に全力を挙げるものであるが、全ての戦闘的労働者が共にこの任務につくことを訴えるものである。

「一人の首切りも許さない」との労働者の原則を貫いて闘い抜いてきた全金本山闘争は現在、その正念場とも言わべき局面をむかえている。

組合分裂・右翼特防導入・ロックアウト・官憲の全面介入という、ありとあらゆる闘争に殺攻撃に對し、原職奪還、別棟就労粉砕・二組解体・暴力ガードマン追放、暴力労政粉砕のスローガンを高々と掲げ全力闘争をもって闘い抜いてきた全金本山支部労働者の闘いは、それが労働者の階級的良心を守り抜く闘いであつたが故に全国の労働者の熱い共感を呼びおこし各地での支援連帯委結成を続々と促したのである。しかも、この本山支部労働者の原則的闘いは総評・全金等の既成労働戦線の争議収拾・労使正常化路線と真向うからぶつかるものであり、それ故にこそ、支援連帯委に結集する労働者にとって、本山闘争に連帯し、これを支援するという事は自らの職場においても、既成指導部の統制をはねのけ、これと対決することを余儀なくされたものであつた。言いかえるならば、本山闘争に連帯する質とは本山闘争の切り拓いた地平に自らが立つことであり、闘いを共有することであつたのだ。「本山闘争を自らの職場にのこす言葉は決して、支援」の意味を、お

は「第二組合とのトラブル防止」を口実とし、た分離就労であり、本山支部（第一組合）員を金網で囲った別棟に収容し、支部の門前実力就労闘争を封殺せんとする資本の「争議収拾」策動であり、明確な攻撃としてあるのだ。この別棟就労をもってする資本の争議収拾策動に對して本山支部は、この間一貫して別棟拒否、原職実力奪還の闘いを闘い抜いてきた。この別棟就労か原職実力奪還かの論争は単なる戦術上の問題たるにとどまらず、文字通り本山闘争の真価を問うものであり、また本山闘争が革命派労働運動の全国的拠点闘争としてある以上、戦闘的労働者が構築せんとする革命派労働運動の内実と方向性にかかわるものである。

のなかで一定の孤立を余儀なくされ、窮迫するという事態のなかで、それを支えざる支援体制の確立が不可欠のものとなるのだが、支部の財政の窮迫を見越して争議収拾（原職）路線を押しつける既成戦線に對し全国的に反撃するに至っていない現状、すなわち革命派労働者運動の全国的・潮流的な未形成の現段階ことが問われねばならないのだ。

手伝い」に歪小化することではなかつたのだ。その意味で、本山闘争とは、それが支部の闘いであるのみならず、まさしく、支部一支援を貫く闘いこそが本山闘争であるのであり、現在の本山闘争の直面する壁を支部一支援連帯委を貫く戦闘布陣のより一層の強化をもって突破しなければならない。

すなわち、本山闘争が全国の心ある労働者の共感を呼びおこし、支援連帯に立ちあがらせ、各地での営業所闘争や仙台現地結集を闘い抜かせた根拠こそでもない、この本山支部労働者の不屈の闘いであり苦闘にもめげず貫き通す階級的原则の堅持への共感だつたのだ。そして、革命派労働運動の構築とは、この本山闘争を孤立させることなく、いやむしろ、全国に本山闘争を拡大し、多くの労働者が本山のように闘うことをその出発点とすべきものである。

本党支部の闘いを孤立させてはならない。本山支部労働者に敗北への道を歩ませてはならない。我々は今こそ、この間の支援連帯委活動の不十分性を厳密に点検し、本党支部を先頭として突き進む巨大なうねりを全国的につくり出さねばならない。そのためには、全国の支援連帯委の強固な再構築を押し計り、営業所抗議闘争と仙台現地門前結集をしっかりと結びつけ闘い抜かねばならない。しかもこの闘いに同盟支配下で闘かっている戦闘的労働者、企業閉鎖、倒産攻撃と闘う労働者、中・小未組織の労働者の闘いを結びつけなければならぬ。教育社闘争やヤシカ闘争等の闘いをしっかりと結びつけ、全国的に拡大しなければならぬ。再度繰り返すが、今春闘こそはその絶好のチャンスなのである。

「門前か生産点か」という戦術位相の問題として論じてはならない。なぜならば、この論争こそは単なる戦術問題ではなく、はっきりと本山闘争の、ひいては革命派労働運動の路線をめぐる問題としてあるからだ。また、それと同時にこのような提案がなされてくるところの根拠をしっかりと見定めておかなければならない。そして、これこそが現在の本山闘争が直面する壁に他ならない

では、この間一貫して確認されてきた本山闘争のこの原則点から見れば別棟就労を受け入れようとする提案は、はたして何を意味するものであろうか。我々はこの別棟就労方針を論じる時に、それが「攻勢的戦術」であるのか否か、はたまた「門前か生産点か」という戦術位相の問題として論じてはならない。なぜならば、この論争こそは単なる戦術問題ではなく、はっきりと本山闘争の、ひいては革命派労働運動の路線をめぐる問題としてあるからだ。また、それと同時にこのような提案がなされてくるところの根拠をしっかりと見定めておかなければならない。そして、これこそが現在の本山闘争が直面する壁に他ならない

本党支部の闘いを孤立させてはならない。本山支部労働者に敗北への道を歩ませてはならない。我々は今こそ、この間の支援連帯委活動の不十分性を厳密に点検し、本党支部を先頭として突き進む巨大なうねりを全国的につくり出さねばならない。そのためには、全国の支援連帯委の強固な再構築を押し計り、営業所抗議闘争と仙台現地門前結集をしっかりと結びつけ闘い抜かねばならない。しかもこの闘いに同盟支配下で闘かっている戦闘的労働者、企業閉鎖、倒産攻撃と闘う労働者、中・小未組織の労働者の闘いを結びつけなければならぬ。教育社闘争やヤシカ闘争等の闘いをしっかりと結びつけ、全国的に拡大しなければならぬ。再度繰り返すが、今春闘こそはその絶好のチャンスなのである。

現在、支部が直面する壁とは、昨年十二月支援連帯委全国代表者会議を前後して開始された別棟就労をめぐる論争の中に端的に現わされているところのものである。この論争とは現在の本山闘争の膠着局面を打破する方途をめぐるものであり、その一つとして提出されたのが別棟就労をもって新たな攻勢局面を切り拓くとする見解である。別棟就労と

現在、支部が直面する壁とは、昨年十二月支援連帯委全国代表者会議を前後して開始された別棟就労をめぐる論争の中に端的に現わされているところのものである。この論争とは現在の本山闘争の膠着局面を打破する方途をめぐるものであり、その一つとして提出されたのが別棟就労をもって新たな攻勢局面を切り拓くとする見解である。別棟就労と

現在、支部が直面する壁とは、昨年十二月支援連帯委全国代表者会議を前後して開始された別棟就労をめぐる論争の中に端的に現わされているところのものである。この論争とは現在の本山闘争の膠着局面を打破する方途をめぐるものであり、その一つとして提出されたのが別棟就労をもって新たな攻勢局面を切り拓くとする見解である。別棟就労と

現在、支部が直面する壁とは、昨年十二月支援連帯委全国代表者会議を前後して開始された別棟就労をめぐる論争の中に端的に現わされているところのものである。この論争とは現在の本山闘争の膠着局面を打破する方途をめぐるものであり、その一つとして提出されたのが別棟就労をもって新たな攻勢局面を切り拓くとする見解である。別棟就労と

現在、支部が直面する壁とは、昨年十二月支援連帯委全国代表者会議を前後して開始された別棟就労をめぐる論争の中に端的に現わされているところのものである。この論争とは現在の本山闘争の膠着局面を打破する方途をめぐるものであり、その一つとして提出されたのが別棟就労をもって新たな攻勢局面を切り拓くとする見解である。別棟就労と

現在、支部が直面する壁とは、昨年十二月支援連帯委全国代表者会議を前後して開始された別棟就労をめぐる論争の中に端的に現わされているところのものである。この論争とは現在の本山闘争の膠着局面を打破する方途をめぐるものであり、その一つとして提出されたのが別棟就労をもって新たな攻勢局面を切り拓くとする見解である。別棟就労と